

5
[24-4]

タイ側アシスタントからみたDDプロジェクト

(1985年11月8日、コンケンにおけるセミナーから、林 行夫 訳)

Somkiatの発言要旨

私は、他の 7-8 人と共に、今回の日本人による研究チームのアシスタントとして、10ヶ月間参加いたしました。われわれにとってこの参加は、東北タイ農村の人々の生活状態を知ると同時に、調査でタイにやってきた日本人研究者の人々との共同生活を経験するのに大変よい機会であったと思っています。以前にわれわれがもっていた日本人についての知識というのは、目覚ましい近代化、発展を遂げた国の人々であり、われわれも彼らに習うべきであるというものでした。ですから、私自身、そういう彼らに関心がありましたので、今回の参加は、収入をうることの外に、彼らの何がそうさせたのかを知るよい機会でもあると考えておりました。

調査村ドンデーン（以下 DD と略）で、われわれは、日本の研究者たちが資料を集める際のアシスタントとして、また、通訳として働きました。資料は、質問票を用いたり、記録、観察など、多くの方法によって収集されました。日本人チームがあらゆる資料をフォローできるように、こ

れを手伝った人々は、学士、修士の者に加え、村内の key man（ボーケン、ボーマーのこと）と多岐にわたりました。私がもっとも大切だと思うことは、村の状況をよく知るそのような村人たちが、調査者を実に誠心誠意良く助けて手伝ってくれたことです。思うに、調査者の一人一人がエゴイスティックではない日本人を、村人たちが愛していたからでしょう。ですから、資料は最大限に集めることができました。

しかし、資料収集の仲介者であるわれわれとしては、若干の言葉の問題がありました。ここで資料の内容に関して大切なことと思われるのは、ヘットナムカンやモータムなど、方言そのものがたくさん使われたことです。これらの言葉の意味は、ときとして標準タイ語によってさえ実際に説明するのが困難です。しかし、日本人の研究者は、これを理解しようとし、われわれもこれに努めました。ときとしてわれわれタイ人、イサンの人々は、ある質問に対して答えるがままに答えますが、われわれはこれを書き留めました。この DD 村調査で本当に良いことと思うのは、村の人々が答えたままを書き留めるように努めて、本当の事実をつきとめるまでこれを繰り返したことです。

集めた資料をチェックする方法としては、かつて水野氏が調査した際の資料があるので、今回収集したものと期間をおいた比較参照が可能です。

今回のプロジェクトでの資料は、たとえ最悪の場合でも、また、もっとも不確実のものであったとしても、示唆的であり、これまでのタイ人が行った多くの調査研究や他のどのプロジェクトよりも優れたものだと思います。

この調査プロジェクトの成果が日本人のためのものなのか、タイ人にとってはどのような利益があるのかという問題については、次のように思います。

調査を終えた今、私は研究の目的というのは、二つに要約できると考えます。ひとつは研究者自身のものであり、いまひとつは、ある種の問題解決のためにどうすればそれが可能かを知らするためのものです。DD プロジェクトの場合、今回の日本人研究者は、東北タイ農村の状況、タイ国の状況を知る必要からこの調査研究を行ったと思います。そのようにしてえられた知識を誰が使うか、あるいは誰が利益をうるかということに関しては、私は日本政府とタイ政府、あるいは、日本企業、タイ企業の双方に、同等に、そのチャンスがあると思います。いずれにせよ、私は今回の研究成果が、われわれタイ国に何らかの利益を少なからずもたらすことを望んでいます。

この場をかりて、私は、調査研究にやってこられ、われわれはどうであるのかを知らしめてくれた日本の研究者の方がたに、タイ人として深く

御礼申し上げたいと思います。そして、最後に、御臨席の（国務に携わる）栄誉ある（phu mi kiat）タイの方々に、ひとつ心に留めておいて頂きたいことがあります。これまでにわれわれは、われわれ自身のことを彼ら（日本人）と同じほどに知っていたのかどうか。また、どのように改善すればわれわれは彼らと同じほどに、また、彼ら以上にわれわれのを知ることができるのか、ということでもあります。

では、続いてソンシンさんをお願いします。有難うございました。

Songsin の発言要旨

ここで私は、アシスタントのひとりとして、村の人々と日本の方がたの印象について述べたいと思います。

まず、DD 村の人々についてですが、すでにソムキアットさんが述べたように、村の人々は、外からの住人である日本人やわれわれを、大変可愛がってくれました。東北タイに住む村人から、私は彼らの実直さ、誠実さ、暖かさというものを知りました。次のような言葉が私たちの印象として適切かどうか分かりませんが、私が村の人々からうけた感じは、

We can see them in their eyes.

We can see in their smile.

というものです。ですから、私がとくに強く望んでいますのは、タイの国務に就かれています栄誉ある方々が村人の重要さにお気付きになること

であります。それから、村の人々は、われわれの援助を心から必要としています。ですから、そのような方々が早急に彼ら村人を援助されることを切に希望いたします。

次に、日本の研究者の方がたですが、先にソムキアットさんがいったように、今日、影響力ある国となった日本の人々がどんな風にやるのか、どのような暮らしをするのか、と思っていました。共に仕事をした日本人をみて分かったのですが、彼らにはけじめ、集中力といった特性があります。つまり、仕事では仕事をし、遊びでは遊ぶ。私は、そのようなタイ人と出会ったことはありませんでした。とくに、私自身が今度奉職することになった役人の職場では、大変失望しました。共に仕事をした日本人とタイ人を比べれば、大きな違いがあります。たとえば、ひとつには、村人の生活に適應し、村人の中にはいって行く日本人の能力です。タイ人の調査研究者には、彼ら日本人と同じような能力があるのでしょうか。つまり、日本人は村人と同じあらゆるものを食べ、同じように振る舞います。でも、タイ人が村にはいった場合、これもあれもできないし、耐えられない。そんなことで仕事をやっても、どうして彼ら村人を知ることができるのでしょうか。これは、日本人からえたひとつのことでありました。

さらに、日本人の仕事ぶりについてですが、彼らは、本当に助け合うチ

ームという形式で仕事をするということです。これは、ワンマンショーを好み、グループを結成してやってもあまりうまくゆかないタイ人とは異なるものでした。これも頭に留め置きたいことです。

もうひとつ、私には忘れられない出来事があります。多勢の友人と仕事をともにして、終ってみれば、ひとりの友人が亡くなったことです。彼女は、私の大切な友人でした。どのようにいってよいのか分からないのですが――。学生として楽しい生活を共にし、同じ村で仕事をした友人が亡くなったことは、われわれアシスタントとしても大変残念で、悲しいことでした。このへんにしておきます。さようなら。